



KODAK Gray Scale



浪花みやげ二編



5441
76



我人爲妙藥傳 初編

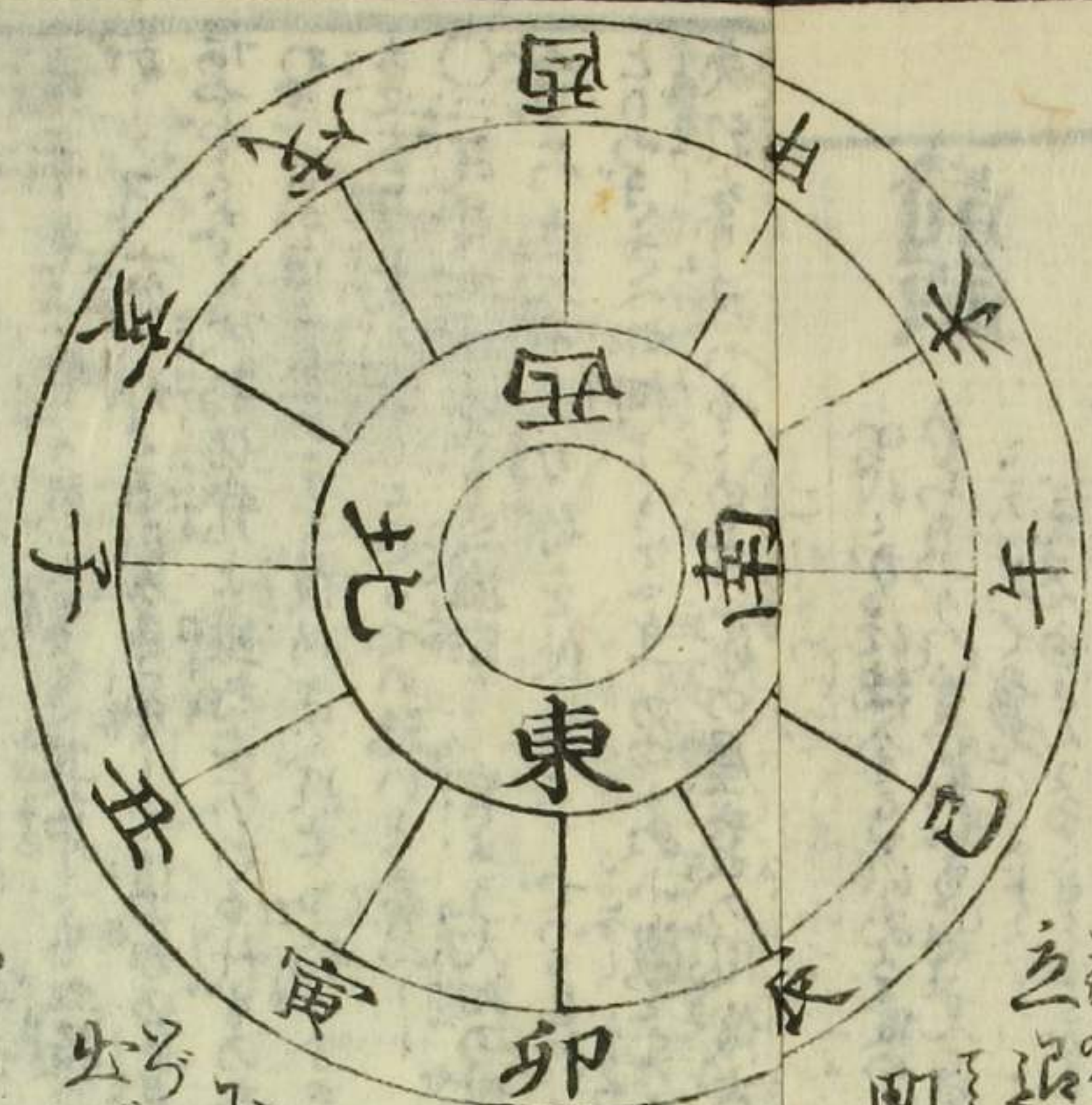
芭蕉の根みぬちろし水一合
 中に入れて煮るその熱は妙中
 ろうがうちろしの葉せんでるち
 飛井の水を結あると一しき
 痔のいんまきの油とつけてす
 さてい熱のおぬるもろろ
 目(邪)の入るまの油の塊の
 血うんの(小)とこませて入
 昆布の根と根のうんの葉と
 うのかわづいでぬるが葉と
 川(ら)の葉の(の)の(の)の(の)
 おころよよの病人よいむ
 おころあはせあはせあはせ
 一敷(敷)うけむむむむのえ
 くらまてあやまこしで酒でのり
 田中の葉とやうのてたく目
 歯(い)の(の)の(の)の(の)の(の)
 いきてせんそのむと一しき
 ぼつ(つ)あ(ら)う(わ)と(せ)ん(じ)う(わ)ら(へ)
 度(度)と(と)と(と)と(と)と(と)と(と)
 葉と(と)と(と)と(と)と(と)と(と)
 葉の(の)は(の)の(の)で(の)の(の)の(の)
 一(一)が(一)と(一)と(一)と(一)と(一)と(一)
 とれぞ吐血の妙(の)の(の)の(の)

ひせん(ひ)ち(ち)ち(ち)ち(ち)ち(ち)ち(ち)
 せ(せ)し(し)ん(ん)入(入)て(て)せ(せ)ん(ん)の(の)む(む)な(な)し
 う(う)た(た)病(病)あ(あ)ら(ら)わ(わ)り(り)の(の)夏(夏)小(小)豆(豆)
 ま(ま)て(て)白(白)花(花)の(の)た(た)ん(ん)ち(ち)も(も)よ(よ)し
 せ(せ)う(う)ん(ん)は(は)神(神)ぶ(ぶ)う(う)の(の)白(白)根(根)二十(二十)片(片)
 せ(せ)ん(ん)じ(じ)て(て)の(の)んで(で)あ(あ)ら(ら)も(も)煮(煮)て(て)く(く)
 た(た)ん(ん)む(む)ひ(ひ)せ(せ)め(め)の(の)ち(ち)ち(ち)ち(ち)ち(ち)ち(ち)
 上(上)葉(葉)二(二)つ(つ)う(う)せ(せ)ん(ん)の(の)む(む)べ(べ)ー
 ち(ち)ち(ち)ち(ち)ち(ち)ち(ち)ち(ち)ち(ち)ち(ち)ち(ち)ち(ち)
 大(大)根(根)の(の)ん(ん)ご(ご)わ(わ)ん(ん)一(一)ツ(ツ)く(く)し
 腫(腫)痛(痛)ま(ま)ら(ら)う(う)ん(ん)根(根)と(と)こ(こ)の(の)ち(ち)
 魚(魚)骨(骨)の(の)う(う)ら(ら)ぶ(ぶ)ら(ら)ぶ(ぶ)ら(ら)ぶ(ぶ)ら(ら)ぶ(ぶ)
 紐(紐)の(の)か(か)ら(ら)ら(ら)ら(ら)ら(ら)ら(ら)ら(ら)ら(ら)ら(ら)
 花(花)の(の)こ(こ)の(の)あ(あ)ら(ら)の(の)毒(毒)か(か)な(な)ら(ら)ら(ら)
 け(け)い(い)と(と)け(け)い(い)と(と)け(け)い(い)と(と)け(け)い(い)と(と)
 酒(酒)の(の)ど(ど)く(く)本(本)め(め)は(は)け(け)す(す)ら(ら)ぶ(ぶ)の(の)茶(茶)
 さ(さ)て(て)ま(ま)け(け)ん(ん)が(が)あ(あ)ら(ら)ら(ら)ら(ら)ら(ら)ら(ら)
 ら(ら)い(い)あ(あ)ら(ら)ら(ら)の(の)病(病)の(の)い(い)の(の)い(い)ま(ま)
 せ(せ)う(う)ら(ら)ら(ら)ら(ら)ら(ら)ら(ら)ら(ら)ら(ら)ら(ら)ら(ら)
 三(三)月(月)の(の)ち(ち)ち(ち)ち(ち)ち(ち)ち(ち)ち(ち)ち(ち)ち(ち)
 外(外)の(の)月(月)は(は)い(い)ら(ら)ら(ら)ら(ら)ら(ら)ら(ら)ら(ら)ら(ら)

火用心

よくつけよほら程
 知られたこの火らろ
 めるせばわろひたす

近火の言へ先家内にて主人父母あるは老人病人小児
 等第一むん小亭まふても子代ふても年かこの人先
 活神棚次小持佛堂の本尊先祖の位牌を去帳も
 懸小とりあつ免拈其意おつる心うけおべし其人小付そひ早く
 立退せやぐ其方角一二
 町の留守りうのてまこの
 おて頼むべしその所と
 け園小出て天井と張
 おきて家内奉生の心
 けいん庵一そ何とも
 おげはとよく考へ一方に
 出べし但し老人病人かどい
 ふるれ家物明を憂わら務おひ



風呂一紀あど頼く用意い
 専ましく入毎秋家内火の元のとるとありる後ゆ事
 ○用心けよひとつるいも何もうも唯法主人の心ひとんぞ

書林兼草紙



忠臣藏穴さし二編

○四段目 塩治判官(居)よつと大作と門戸をこもる夏
蔵重なる情の中なる鎌倉山の八重九重いろ、

さつを取よせし殿の御氣をなぐさめんと
勢向をまひり合点ゆは出入の花を、
つげまよるこへ安して出まは又家中を内分て
取はゆ中もまよるまぬえつ、何を閉門中の
古まなれハ陽と氣りしハ極の枝をいろくむらつ
うまこが有るハ足利がを恐るまことらふべ

○又は切腹の検査ふく祝儀ことハ遠くハ判官
○右堂業師が上使きこるま先おさるまこの用をせよ
こんこんで横村をさるま、中さんあはくハ甚く不
もよ切腹の検査ふく祝儀ことハ遠くハ判官

○五段目 九太夫おやハ邪智ふま都て至つ
はの能あの中なる定九布を何ゆかんとせや其
分らばおん、悪直又をまきりして勘定、さま
○勘平ハ山こま猪出何しニツ玉、さまハ性
あつり、猪、い、つ、て、旅、人、を、む、ら、ん、え、う、過、い、う、と、死、を、承、知、し、ち、あ、り、



茶、さ、ま、こ、の、懐、中、を、さ、さ、り、見、こ、甚、く、お、そ、く、さ、い、ふ、こ、た、と、懐、中、に、茶、
何、つ、こ、も、ニ、ツ、玉、さ、ま、お、と、め、れ、ゆ、の、生、え、る、ま、理、を、金、く、勘、平、う、ろ、



○六段目 今日ハ六月廿九日ある、
女、ま、ハ、茶、の、後、作、の、こ、の、
悪、法、小、紋、な、と、の、結、入、に、定、九、ハ、黒、
羽、二、重、の、こ、の、出、る、を、さ、さ、り、と、
世、人、の、ま、あ、ひ、く、三、日、を、や、に、定、九、
全、体、老、人、の、大、い、ん、る、夜、中、多、の、
金、を、も、ら、く、一、人、と、す、く、床、を、さ、
さ、さ、る、予、算、ち、ち、ひ、と、さ、い、



浄瑠璃奇伝 初編

繪本太功記

○本誌寺の坊主侍女との恋の物語
初春洛東の地にお屋の花ざり
侍女も小透されしうがせはか
東山地を栞視の栞の盛の車
初春のうら月に入花のころ
春より七十番の時をとり
まのれ何ぞうあ年又同有るも月
栞の嘆といか栞あれをさあれ目

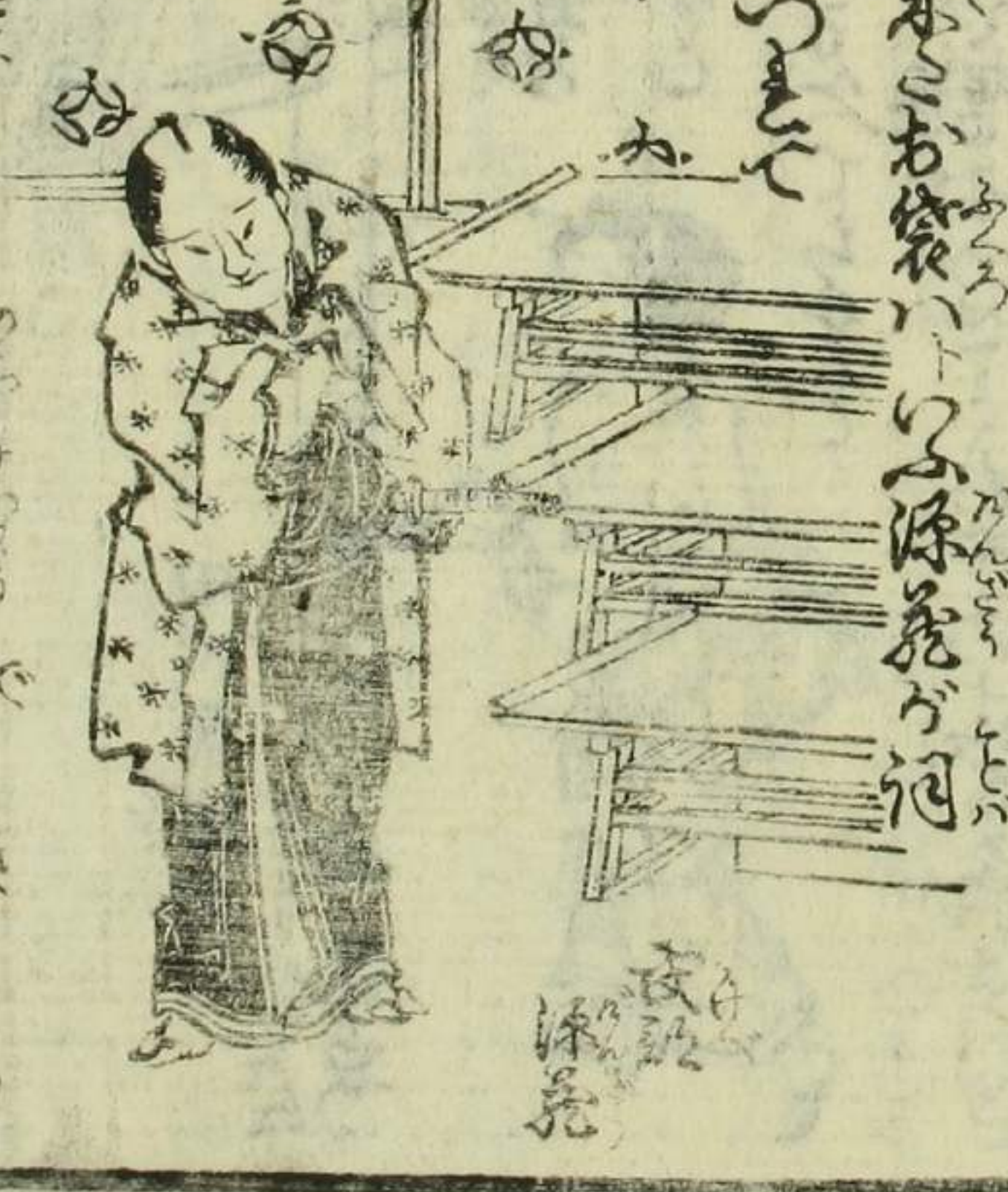
菅原傳授

○よのあし上り者連もあはれは
男づつれをまゝに女づつれ
まゝに女づつれをまゝに
まゝに女づつれをまゝに



寺

又千代が廻りどの栞
寺入とも中か知らるる



しるがき... (Vertical text on the left side of the page)



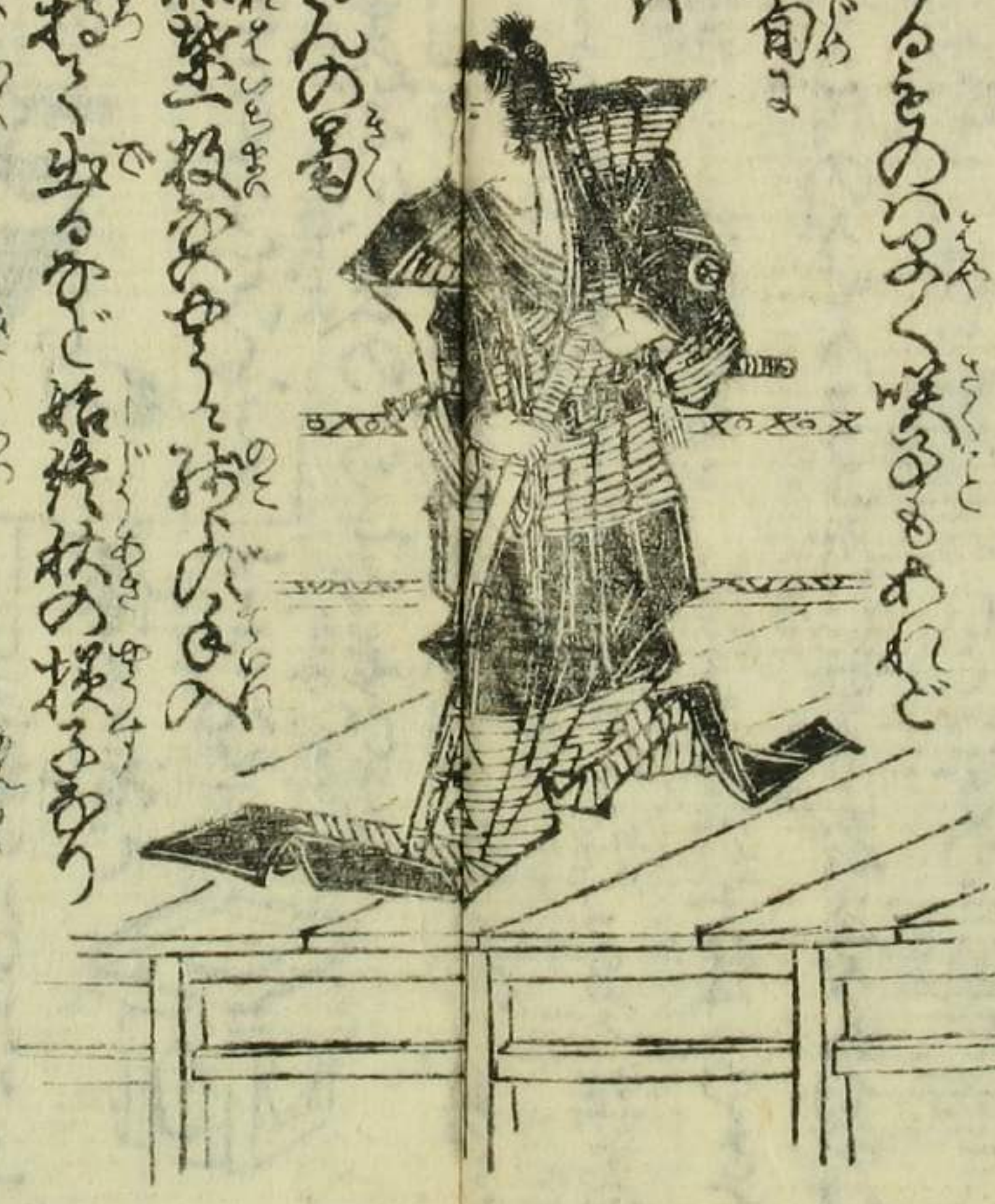
浄瑠璃奇伝

編三

本朝

○四の切傳後の鮫で捕鯨が河上雲丸は六月廿日己酉辰巳の果
捕鯨が今日この方には時非おれ夜が首度集りし頃の事の上
通りは四月の上旬なり其翌日の捕鯨が切腹あり志も鯨の
味時もあり金件終つて秋の葉もく四月の初は鯨をわびつても
近年鯨捕りて育てるものいふ鯨もあつて

頃根は鯨の首は四月の上旬
味は(夫)又四月廿日
合息のり其上花のり



蜀の花小して夏末の花んの香
かむと伸し短るこちめ枯葉に散る中のゆひも入
仕りい又園の向もとむる出るかど結終秋の候あり
花園入の候もあつて後るうもあつてこいふ文もあつて
阿れど四月廿日ころもの盡り浅見せふころの大なる世相は仕事
あり夫あり始り下都が評定を尋ねてこいふあつてこいふ言も
あつてあつて何の噂もあつてあつて九月は候もあつてあつて其
上信州の寒國もあつて四月廿日ころもの盡りあつてあつて
又結終の泡もあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
分りあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
四月廿日ころもの盡りあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて



浄瑠璃奇案四編

編四

二代鑑

○此は浄瑠璃の二代鑑
 名はあやうき世の
 名はあやうき世の
 名はあやうき世の
 名はあやうき世の



揚布洗目冊

○官道舟の切腹
 娘かてらう洞
 六年十一年か
 かのどく死出の
 三途の川の川



戀飛脚

○此は浄瑠璃の恋飛脚
 名はあやうき世の
 名はあやうき世の
 名はあやうき世の
 名はあやうき世の



又橋川も

○此は浄瑠璃の又橋川も
 名はあやうき世の
 名はあやうき世の
 名はあやうき世の
 名はあやうき世の

●編四目次





浄瑠璃奇談 五編

義經本千櫻

○いかに槍を代支取上る年貢の報三ヶ月のつづき... 成る女房小水茶屋... 母親をたまたま作言あれど母親も内の子貢の格合と... 三町あり然れども母親の子に同くあつて... 何れもあつて幸ひ有合とあつて... ○金作とのつづきの

提系が矢をづの提腕... おもひ暗... たとひ... 改め... けり... 捕あり昔... 又提原が... まぐり内... うら... か... 下...



六編 近目出



浄瑠璃本意

編七

義經本櫻

○四の口を引の文向ふ方よりも若草を
 分りわらわらる稚子のそつと三〇歳の中は
 みる茶〇谷の常初青のつと〇春柳生の
 糸長く〇所詮の共風吹とこい
 何れも妻のうらとある中よ
 初より合れ女夫連といふ文向
 初より八月あり二月の御と
 云ひ花とてんすて帰るべき



双葉

○知盛の同大物の沖おつと控焼松明一度は消おつといふ又控焼
 松明星の如くト云又弥左衛門のちとんと控焼い合音が死がのり
 あり〇控焼おつけ一音引とげト云又美奈の控焼から系年二あり
 控焼らうと傘の敷い文祿のゆより始り一抱ふと源平時代より
 受て妻のありおとて書明を引いあり
 〇八橋場でも与まが河小笠の別ち敷生舎といふが
 七つ目が葉種のおもはつそのあつこの
 咲時分りう長糸糸が
 八橋(末)のふ糸糸の
 うつてのふ糸糸の
 るもあつと編屋を帯が評定あり



八編近目本

かげぢしつなまづの鬼



てんぐ



かぶ



さる



なんたやうのまやう



ねとけ



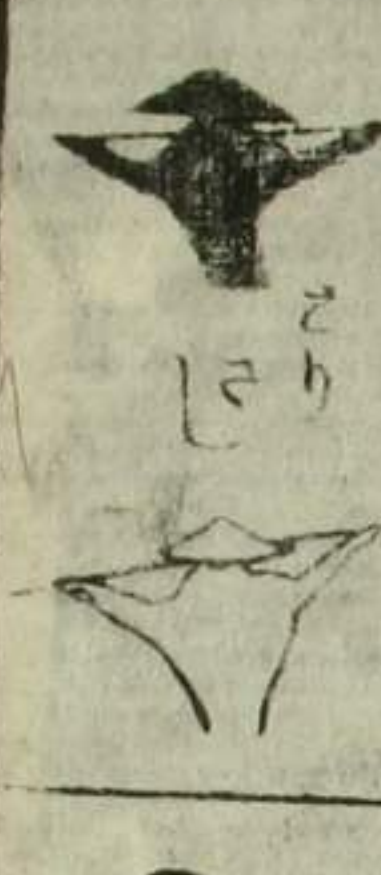
かぶのつゆんぶつ



なぶ



しり



右語かゝらまて新中ぎのころふよりつものこ
 おんかからぬ人のわいれはあはれかまあ
 こいめあつこもひまうつてつむぐ
 學者のまひすれがまう學者と之佛のまひ
 とすれがやとけあつて佛のむあまは天狗
 かりかまのふ孝の人のむすれつひふ
 忠居孝子ともあむ一切すて我孫がふり杖
 の邊りかまのつる諸願ひふりつうか
 りげといふにほそれぬま人の形のことやうが
 突だようつものあつてつむぐ

何事ともいふわいもれつれふあり
 かまらまふころげままうつて
 よもむつれつるかげぢし
 まつれつれがまうつてつむぐ
 長巻とつてつむぐ津願初め乃
 うまのむのぐころあつてつむぐ
 共知とせよまふかまあや孝
 ひつものすれがまうつてつむぐ

早稲田大学図書館



150190323325